高等部における自閉症教育

高等部における自閉症の生徒の指導課題

小・中学部の自閉症教育の成果の引継ぎ

〇自閉症の生徒に分かりやすい学習環境の整備

〇「認知の学習」で獲得した技能を最大限に活用した「般化の学習」の展開

〇全ての学習活動における「社会性の学習」の指導内容の展開

＋

生徒の生活年齢を踏まえた対応

〇青年期の指導に対する適切な教材・教具の開発

〇青年期に獲得するべき社会人としての礼儀作法等の指導

〇生徒一人一人の能力に応じた各教科等における指導内容の精選

卒業後の生活を踏まえた対応

〇本人の適性と本人・保護者の願いに応じた進路指導

〇自閉症の生徒の障害特性に応じた「働く力」の開発・育成と移行支援

〇将来の社会生活に必要な知識・技能の習得

〇個別の移行支援計画に基づく関係機関との連携の充実

高等部における自閉症教育の対応課題

1　高等部段階に適した教室の物理的構造化

（生徒が物を管理しやすい、整理された空間など）

2　高等部段階に適した時間の構造化

（生徒一人一人が個別に使用できるスケジュール表の活用など）

3　高等部段階に適した活動の構造化

（一人で活動や作業ができるようになる支援の仕組みの活用など）

4　社会参加を踏まえたコミュニケーション方法の習得

（生徒一人一人が個別に活用できるコミュニケーションツールの活用など）

5　自閉症の障害特性に応じた教科学習の充実

（実生活に生きる各教科の指導内容の精選など）

6　社会人としての礼儀等の育成

（職場におけるマナーなど）

7　自閉症の障害特性に応じた移行支援の充実

（作業学習、現場実習の在り方など）

高等部における自閉症教育の対応課題

高等部における自閉症教育の対応課題は、校内の環境整備のみに留まりません。自立と社会参加に向けた指導と支援が必要であるとともに、関係機関との連携の下に自閉症の生徒に必要な支援の手だて等に関する理解推進を図ることも学校の重要な役割となります。そのことから、「７つの対応課題」は、以下のような階層構造になっていると考えることができます。

小学部・中学部の実践を踏まえて自閉症の生徒に分かりやすい環境整備を行い、目前に控えた自立と社会参加に向けた指導・支援の充実を図り、円滑な社会参加に向けた移行支援を生徒一人一人に応じて行っていく必要があります。

自閉症の障害特性に応じた移行支援の充実

社会人としての礼儀作法等の育成

自閉症の障害特性に応じた教科学習の充実

社会参加を踏まえたコミュニケーション方法の習得

高等部段階に適した教室の物理的構造化

高等部段階に適した時間の構造化

高等部段階に適した活動の構造化

土台となる3つの構造化

高等部段階に適した教室の物理的構造化

「教室の構造化」は、机や教材等の配置、動線の明確化が基本です。しかし、高等部段階では、学校で獲得した知識・技能を社会生活で生かせるようにする工夫を、全ての学習活動で取り入れる必要があるため、小学部段階のように固定的な構造化である必要はありません。活動する場所や内容に応じて、机や教材の配置を変更することで、活動内容が生徒にとって分かりやすい構造化を図っていきます。

高等部段階に適した時間の構造化

「時間の構造化」は、スケジュール表の理解と使用方法の獲得が基本です。卒業後の社会生活では、周囲の人からの指示は少なくなり、自分で判断して行動することが求められます。そのためには、スケジュールを自分でつくり、納得し、スケジュール表にしたがって活動できるようになることが大切です。スケジュール表に取り入れられる情報量は、生徒一人一人によって異なることに留意し、生徒自らが管理できるスケジュール表とすることが重要です。

高等部段階に適した活動の構造化

「活動の構造化」は、生徒が一人で見通しをもって活動することができるよう、作業する量や手順を明確に示した支援の仕組みを活用することが基本です。卒業後の職場生活では、一定時間、継続して一人で作業ををすることが求められます。自閉症の生徒が見通しをもって、落ち着いて作業を継続するためには一人で作業できるようにする仕組みなどの「活動の構造化」が有効です。一人で作業できるようにする仕組みは、例えば、左の箱から材料を取り、組立て、できたものを右の箱に入れるなど、生徒一人一人の技能や理解の程度等に応じて考えることが大切です。

自閉症の障害特性に応じた教科学習の充実

自閉症の生徒の教科学習は、卒業後の生活に生かすことのできる指導内容を精選することが大切です。そのためには、小学部・中学部で行ってきた学習内容を把握し、生かしていくことが必要です。

また、自閉症の生徒は知的障害が軽度の生徒であっても、言語の能力を細かく実態把握していくと、得意な領域と不得意な領域の能力差が大きいことがあります。例えば、漢字の書き取りのように、答えが一つであるものを記憶する能力は非常に優れているが、文脈に沿って話を理解することが苦手であるといったことが考えられます。

このような生徒の場合、言葉の指示のみで理解をすることに困難を抱えており、教科学習に苦手意識をもっていたり、分からないことを伝えられなかったりすることに留意しなければなりません。

自閉症の生徒の各教科の学習では、生徒一人一人の言語能力と認知の特性に合わせた指導が重要です。

社会参加を踏まえたコミュニケーション方法の習得

自閉症の障害特性の一つは社会性・対人関係の障害です。相手の状況や感情を推測して行動することは、自閉症の生徒にとって最も困難なことの一つです。

このため、「挨拶・返事」など、コミュニケーションの基本的なことがうまくできない生徒もいます。社会生活に必要なマナーの一つである「挨拶・返事」の指導に当たっては、あらゆる場面で臨機応変に対応することを求めるのではなく、生徒一人一人のコミュニケーション能力や集団参加能力等の状態に応じて、確実に対応できることを教えていくことが大切です。

例えば、朝、教室に入る時は、扉から一歩入った場所にある目印に足を揃えて立ち、挨拶をする人の方を向いて、「おはようございます。」と言って頭を下げるといった手順です。このとき、頭を下げる深さやしっかりとした言葉遣いを繰り返し指導し、身に付けていくことが大切です。

社会人としての礼儀作法等の育成

社会人としての礼儀作法等の育成では、「清潔」と「他者との距離」が重要な指導内容です。身辺を清潔に保つことは周囲の人との関係を良好にするために必要なことですが、自閉症の生徒は相手の表情等から感情を推測することを苦手としているため、清潔感を保つことに無頓着な場合があります。したがって、入浴や整髪、ひげ剃りや化粧等の行動の獲得は、日常生活に必要な技能を分析して、家庭との連携の下に一連の行動として獲得する必要があります。

また、社会参加の場面においては、例えば、他者の感情や受け取り方を気にせず、他者に間近まで近づいてしまうことなどがあります。こうした行動は大きなトラブルに発展しかねません。生徒一人一人に理解できる方法で、「他者との距離」を学習する必要があります。

その他、公共交通機関の利用マナーなども指導する必要があり、生徒一人一人に必要と思われる技能を十分に吟味し、確実に身に付くように支援する必要があります。

自閉症の障害特性に応じた移行支援の充実

自閉症の生徒の移行支援では、職場等での生活全体について検討することが大切です。例えば、自閉症の生徒の場合、仕事中よりも、自由時間の使い方に戸惑ってしまう場合があります。休憩時間に、どうしてよいかわからないために何となく歩きまわってしまう、などの行動が問題となることがあります。自閉症の生徒の産業現場等における実習を行なう場合には、このような点に留意して、実習先との事前の打合せ等を充実させ、実習先の理解を求めていく必要があります。

また、学校は職業別に必要な技能を分析・整理することなどにより、自閉症の生徒一人一人の適性に応じた仕事内容や職場環境の選定をしていく必要があります。就労に当たって求められる技能等を校内の指導で高められるように、指導内容・方法の工夫を組織的に行い、移行支援を進めることが重要です。